

## 「二十四密の音楽」 松平 敬

多くの作曲家の晩年の作品に共通するのは、高い精神性や枯淡の境地であろう。このことは、ベートーヴェン、マーラーなど過去の作曲家だけでなく、ストラヴィンスキー、フェルトマンなど20世紀以降の作曲家の晩年の作品にも共通している。死を目前にして感覚が研ぎ澄まされ、無駄な音が削ぎ落とされることによって、この「晩年様式」が確立されてくるのだろう。そして、シュトックハウゼン晩年の一連の作品も例外ではない。7つのオペラによる連作『光』の最終章『光の日曜日』（1998～2003）あたりから、一つ一つの音の美しさを愛おむような「あちら側」のオーラが感じられる作品が目立つようになってきた。この傾向は、『光』に続く連作『クラング』（2004～07）の前半にも引き継がれる。『昇天』（2004～05）、『天国の扉』（2005）などのタイトルからも、近づいてくる死を彼が強く意識していることが明らかだ。

そうした流れを考えると、今回演奏される「宇宙の脈動」（2006～07）は異様としか言いようがない。晩年様式に典型的な枯れた世界とは対極の、あまりにも「元気な」音楽だからだ。ゆっくりとした低音の電子音に、少しずつ新たな電子音の層が重なっていき、その音像は徐々に激しさと密度を増していく。もうそろそろクライマックスだろうと思っても、そこにさらに新しい層が加わり、音楽の限界が次々と更新されていく。「三密」どころか「二十四密」の暴風雨のような音響だ。

さて、私が初めてこの作品の実演を聴いたのは2007年のシュトックハウゼン講習会であった。作品冒頭こそ油断していたものの、その怒濤の展開に呆然としたことをよく覚えている。予想外だったのは、電子音響に耐性の強い人が多いであろうこの講習会の受講生の少なからぬ人たちが、演奏途中に具合が悪くなって客席から出て行ったことである。それぞれ異なる空間移動を伴う24層の濃密な電子音が、聴き手の平衡感覚を狂わせてしまうことも容易に想像ができる。

シュトックハウゼンはこの作品を、24の惑星、または衛星の回転に喩えている。各層の音域やテンポを幅広く設定していることから、この作品を宇宙全体の音楽化と捉えていることは明らかだ。しかし、私がこの曲を聴いて感じたのは、自分自身がマイクロの世界に迷い込み、自分自身を取り囲む無数の素粒子の運動と一体化するようなイメージであった。ひょっとするとシュトックハウゼンは、死によって肉体が自然に帰り、宇宙エネルギーと融合するようなイメージをこの作品に込めたのではないか？ そうだとすると、シュトックハウゼンの考える死の世界は、多くの人の考える涅槃の境地のような平安に満ちた世界ではなく、「宇宙の脈動」のような、運動性に満ちたギラギラとした世界であることになる。こうした意表をついた死のイメージは、「新しい呼吸の方法を見つけた！」と言いながら立ち上がり、その瞬間に亡くなってしまったシュトックハウゼンの劇的な最期を考えれば、それほど突飛でもないのかもしれない。